

## 「師」と「士」のあいだで



「師」と「士」。

どちらも「し」と読むこの二つの字について、私は長いあいだ、深く考えたことがありませんでした。ところが近年、ある解釈に出会い、心のどこかがざわつきました。

それは、「師とは、騙されたい人を騙す職業であり、士とは、騙されたくない人を騙す職業である」という、いささか刺激的な一文でした。

乱暴な表現ですね。しかし、不快感よりも先に、「なるほど」と思ってしまった自分がいました。

医師、看護師、教師、美容師などを考えてみると、「師」のつく職業には必ず、不安や期待を抱えた人の姿があります。治りたい、良くなりたい、分かるようになりたい、美しくなりたい。相手は多くの場合、「信じたい」という気持ちを胸に、こちらを見つめています。

こうした気持ちに応えるためには、知識や技術だけでは足りません。言葉の選び方、声の調子、沈黙の使い方。ときには、確信が十分でなくとも、「大丈夫ですよ」と伝える勇気が必要になることもあります。それは嘘とは違いますが、事実だけを淡々と並べる態度とも違います。

人の心に一步踏み込む、その微妙な距離感こそが、「師」の仕事なのかもしれません。

もっとも、「師」という字には、どこか胡散臭さがつきまとうのも事実です。手品師、詐欺師、ぺてん師。人の心の隙間を見抜き、巧みに入り込む者たちです。漁師が魚の習性を知り尽くして網を投げる姿にも、私は同じ匂いを感じます。人の心であれ、魚であれ、相手を深く知ることは、教育力になると同時に、騙すという危うさも伴うのです。

一方、「士」のつく職業はどうでしょうか。

弁護士、税理士、会計士。彼らは感情よりも制度や理屈を重んじます。相手がどれほど望んでも、認められないものは認められない。希望よりも現実を、慰めよりも結論を示さなければならぬ場面が少なくありません。

さらに、博士、技術士、建築士、消防士。そこから連想されるのは、冷静さ、正確さ、そして覚悟です。武士や戦士という言葉が象徴するように、「士」には、踏みとどまらず前に出る強さがあります。人の気持ちに寄り添うよりも、守るべき原理や責任を優先する姿勢です。

本校には、理学療法士や作業療法士であり、同時に教師でもある教員が10名以上います。彼らは、科学的根拠に基づいて判断する「士」であると同時に、学生の不安や迷いに向き合う「師」でもあります。

また、看護師であり教師である教員も同数います。こちらは「師」×「師」ですから、より一層、優しさや寄り添いを求められます。しかし、命を預かる臨床の現場では、否応なく厳格な「士」の顔を持たざるを得ません。

こうして考えてみると、「師」と「士」は対立するものではなく、行き来するものなのだと思います。人によっては「士」が前に出る日もあれば、「師」が強く表に出る日もある。同じ人であっても、その揺れは自然なことなのでしょう。

では、私は今、どちらの「し」を生きているのだろうか。そして、これから、どちらの「し」を大切にしていきたいのだろうか。そんな問いを胸に、今日もまた、学生や教職員と和やかに向き合っている自分がいます。

文責 林 要喜知